11）奥羽大学歯学部附属病院予診科における最近の初診患者の動向　－第４報－

○清野　晃孝，渡邉　　崇，保田　　穣，佐藤　健太
北條健太郎，山家　尚仁，小松　憲明，鈴木　海路
福島　和美，宮嶋　　唯，向井雄一郎，渡辺　　聡
渡辺　議之，梅村浩二郎，箱崎　麗子，佐々木重夫
杉田　俊博
（奥羽大・歯・附属病院・地域医療支援歯科）

【目　的】近年の地域環境の著しい変化と本院の歯科医師の数的構成に対応すべく初診対応を原則午前のみに変更してからの，初診患者の動向について本年と過去の比較検討を行ったので報告した。

【調査方法】対象は，令和元年８月19日から９月30日までにおいて本院予診科に来院した初診患者の中で，アンケートに同意の得られた199名である。アンケート項目は，性別，年齢，職業，住所，主訴，交通手段，当院選択理由の７項目とした。

【結果および考察】本院予診科における直近の初診患者の動向をH26年，H27年およびH29年の同時期と比較した。

１．アンケートの同意率は88％にまで低下したことは，患者意識に多くの社会問題を抱える現代日本の一端を表わすものと思われた。

２．性別割合は，女性の割合が増加し，64％を占めていた。

３．年代別では，20代，30代，40代は減少し，患者層のピークは50代であり，高齢者のなかで80歳以上は確実に増加していることも特徴的であった。

４．職業は　男性の職業別では，本年度は会社員が43％を示し，公務員の増加を認め，他は減少傾向にあり，女性の職業別においては，会社員は伸びず，高齢者を反映し無職と専業主婦が上位を占めた。

５．住所別割合では，郡山市内は54％であり郡山富田駅効果は未だなく，会津地方よりもいわき方面からの来院が多かった。

６．主訴別割合では，歯痛は最大値であるも伸びはなく，違和感が微増していた。

７．交通手段では圧倒的に車が多く，88％を占め。郡山市において本院の所在位置は，自家用車がなければ不便であり，バスと同様に磐越西線はまだまだ浸透していないようであった。

８．当院を選択した理由は，男性女性とも「以前の受診から」が多いものの他院からの勧め，他院からの紹介が，増加傾向を示した。

本調査から，初診患者を原則午前のみに変更したにも拘らず患者数は増加し，患者意識の変化と高齢化が進んでいることが明確に把握できた。

12）生体構造学講座法歯学５年間における鑑定実績報告　－画像からの個人識別における考察を加えて－

○花岡　洋一
（奥羽大・歯・生体構造）

【緒　言】平成26年11月１日，関東地区以外では初となる，専任教授を置いた法歯学教育研究組織が奥羽大学に誕生してから丸５年が経過した。そこで第64回本学会で発表した３年間の業績に，新たに２年間の業績を追加して，ビデオ画像における個人識別の特殊性についての考察と共に報告する。

【結　果】１．平成26年11月１日から令和元年10月31日までの５年間における総鑑定数は66件であった。

２．依頼者は警視庁が60件で９割以上を占め，茨城県警察本部，山梨県警察本部が２件，山形県警察本部ならびに民間の法律事務所がそれぞれ１件ずつであった。

３．事例の内容は窃盗事件が最も多く24件で，次いで建造物進級18件，強盗12件，強盗致傷7件，強制猥褻６件，詐欺４件，器物破損３件，強盗殺人２件，死体遺棄２件，銃刀法違反１件，放火１件，医療事故１件であった（重複を含む）。

４．　鑑定対象は防犯ビデオ画像が63件で95％以上を占め，白骨，写真，医療記録がそれぞれ１件であった。

【考　察】第64回本学会で発表した総監定数は３年間で33件であったが，その後の２年間で倍増の66件となり，鑑定依頼は増加傾向にあると言える。

依頼者は依然として警視庁が９割以上を占めており，これは発表者の鑑定業績が警視庁内部にさ

らに浸透したためとも思われるが，詳細は定かではない。

鑑定対象は，ビデオ画像の割合が95％にまで上昇した。今後益々防犯ビデオカメラが普及していくものと考えられ，ビデオ画像鑑定の依頼は増加するものと思われる。

個人識別の手段としては，人相及び全身の形状，歯科所見，身体的特徴，着衣・所持品，指掌紋，DNA型が挙げられるが，この内確実性が高いとされているのは，歯科所見，指掌紋，DNA型の３つである。しかしながら，防犯ビデオ画像にこれらが映り込む可能性は極めて低く，それに代わる手段として発表者が用いているのが，着衣・所持品の組み合わせと所作・嗜好の特異性である。同型の着衣・所持品の組み合わせ数が多ければ，別人がその組み合わせを着用・所持している確率は極めて低くなる。さらに，歩行時の癖や特徴，髪型やアクセサリー等の嗜好の同一性を加えることにより，ビデオ画像における個人識別もより確実に実施できるものと判断された。

13）ヒト歯を用いた放射線被ばく線量評価について

○廣瀬　公治[1]，大野　　敬[2]，島村　和宏[3]
池山　丈二[4]，海野　　仁[4]，佐々木啓一[5]
（奥羽大・歯・口腔衛生[1]，奥羽大・歯・口腔外科[2]，
奥羽大・歯・成長発育歯[3]，福島県歯科医師会[4]，
東北大・大学院・口腔システム補綴学分野[5]）

東京電力福島第一原子力発電所の事故による被ばく状況を把握するため，歯の持つ生物学的な特性，すなわち，他の臓器と異なり一旦硬組織が形成された後は代謝されないという特性を活用し，歯の中に保持されている放射性同位元素の測定を行なった。研究には，小児から脱落した，あるいは歯科治療により抜去されたものを十分なインフォームドコンセントのもとに収集した乳歯を用いた。なお，2018年末までには，およそ6000本の乳歯を収集することができた。収集した乳歯は，各々の情報を記録することでアーカイブ化し，厳重管理の下で被ばく線量の評価を行なった。

被ばく線量の評価は，収集した乳歯をイメージングプレート上に配列し，その発光強度から推計することで行なった。その結果，福島県で収集された乳歯の被ばく線量は，対照とした他都道府県と比較して差は認められなかった。

以上の結果は，今後，事故後に形成された乳歯からの放射線被ばく状況を評価するための基礎資料（バックグラウンドデーター）となるものである。よって，この結果を基に，今後も本研究を継続することは，福島県民の健康の保持・増進の一助となるもの考え，その基盤となる乳歯の収集をさらに推進すると同時に，広く福島県民の皆様にその情報を公開する必要があると考える。

14）本学におけるリグロスRを用いた歯周外科治療の臨床成績評価

○児玉　りか[1]，山崎　厚作[1]，山崎　幹子[2]，高橋　慶壮[1]
（奥羽大・歯・歯科保存[1]，奥羽大・大学院・口腔病理[2]）

【緒　言】2016年12月よりヒト塩基性線維芽細胞増殖因子（FGF-2）製剤「リグロスR」が保険適用になった。FGF-2の局所応用は歯周炎によって破壊された歯周組織の再生に有効かつ予後の安定性がエムドゲイン®より優れることが報告されている。本学歯周病学分野では，過去２年間にわたりリグロス®を併用した歯周組織再生療法を78症例実施し，予後を評価している。本報告では，半年以上経過を観察している21歯の治療成績を報告する。

【材料と方法】奥羽大学歯学部附属病院三階総合歯科（歯周）において歯周基本治療後もBOP(+)かつ5㎜以上の歯周ポケットが残存する部位を対象に，2016年12月～2019年６月30日にリグロスRを用いた歯周組織再生療法を施行し術後半年以上経過した21歯（患者13名；平均年齢49.2±12.3歳，男性７名，女性６名）について，術前後のプロービングポケット深さ(PPD)，BOP陽性割合，骨欠損深さ，骨再生割合および骨欠損部位角度を比較・検討した。骨欠損深さはCEJから骨欠損底までの長さ，骨再生率は，術前後の歯槽骨吸収割合[(CEJ～骨欠損底)/(CEJ～根尖)×100(％)]の差，骨欠損部位角度は歯軸を基準に計測した。統計処理は関連する２群のｔ検定を行った。

【結　果】平均PPDは術前6.7±1.7㎜，術後3.5±1.3㎜で減少量は3.2±1.6㎜であった。BOP陽